

せたかむい

古平町役場総務課
842-2181(袋)
平成19年11月1日

年表で読む 古平の歴史

[122]

商工業 ⑨

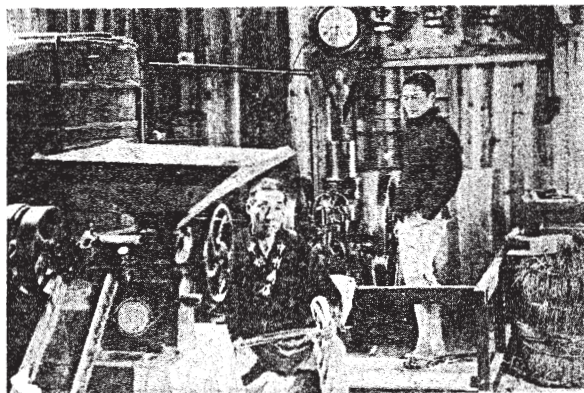
各種工業の盛衰

◆精米業 ー 続く

精米の動力としては水流が利用され、チヨペタン川周辺では現在の宝海寺の前辺り、川沿いに水車を使った精米所があったといわれていて、その対岸の干場で行われていた運動会の写真に建物がわずかに写っているが、確認することはできない。

一方新地町方面では、上流(現在のふるびら温泉周辺)に小さなダムを造り、そこからの水流を利用していたが規模はごく小さいもので、初

めの頃は精米には「バツタリ」と呼ばれる罫が使われていた。



→ 中村源次郎商店の精米所

明治四〇年頃、タバコ問屋や荒物・雜貨商をしていた中村源次郎は、新潟県から発動機と精米機を購入し、新しい設備を利用して精米業を始めた。

それから間もない明治四二年、港町の漁業小町泰治郎も新たに工場を建て精米業を始めている。

◆天然氷と製氷場

明治四〇年(一九〇七)の北海道庁が編集していた殖民公報四四号に、「古平、製氷場一、管内消費四トン、金四十二円(トン十円五十銭)」とあり、この製氷場は古平川の天然氷を採取して販売していたようである。

大正一二年、浜町高野常吉、入船町墓目善次郎外が出資し、浜町冷水川の水を引き、コンクリート槽による天然氷を製造し販売した。浜町と丸山町に氷貯蔵庫を新設し、古島又蔵、相良熊蔵らがこの仕事に当たった。生産高などは明らかではないが、主として魚の輸送用に利用された。

浜町方面では、共同で川の近くの貯め池などを利用して氷を採取し、販売する事業が昭和の初期まで行

われていた。これらの事業はその後、古平漁業組合が製氷工場を新設するまで続けられていた。

◆でんぶん工場相次ぐ

後志地方ではジャガイモの生産量が多いことから、でんぶん(澱粉)の生産も盛んであった。古平でも畑作としてジャガイモの栽培が多かったので、水車を利用してでんぶんを製造するようになった。

自家用としては早くから行われていたが、明治四〇年頃からは営業として製造されるようになった。その頃の生産額はおおよそ次表のようである。(次ページ)

ジャガイモは売り物にならないものや小粒のものなどは、各農家で手製のいもすり器ででんぶんを製造していたようである。

大正三年、第一次世界大戦がぼつ発し、これによつて輸出用の食料品の価格が急激に上がり、一袋七円であつたでんぶんが一七円になるという異常な高騰ぶりだ。世間では「でんぶん成金」と言われる人々も現れたが、古平ではこのような世相にも特に影響は受けなかった。

大正四年、鴨居木の石崎善市が鴨

居木川の水を引き、日本型の水車を新設しでんぶんの製造をした。折からでんぶんが値上がりしており、翌五年には渡辺音吉と共同で工場を増築した。大正七年、第一次世界大戦が終了すると、翌八年にはでんぶんが一袋四円と大暴落したことから工場も閉鎖し解体した。

大正六年、鴨居木の中野恵吉、依田七五郎、榎本伝内らが共同で、スキナイ川を利用し工費三千円で日本型水車を新設し、でんぶんの製造を始めた。

中野雅栄(故人)の談話によると、「当時、馬鈴薯は一俵(五六キログラム)一円二、三〇銭であったが、薯四俵ででんぶん一袋(四五キログラム)が出来た。でんぶん一袋の価格は二、二円で、薯は一日四〇俵から六〇俵をすった。大正八年、でんぶんの価格が大暴落したため製造は中止し、水車小屋、乾燥場、器具一切を一千五

百円で、丸山町の 渡辺商店に売り渡した。渡辺商店ではこの後、建物を解体して鴨居木川上流に移築し、再びでんぶんの製造を始めたが、大正一三年に乾燥室から出火し全焼してしまい、その後は全く事業を止めてしまった。」

でんぶんは簡単な器具で家庭でも容易に製造できることから、一般家庭でも家庭用のでんぶんをつくるところが次第に多くなってきた。また家庭でも栽培されていたじゃがいもの加工として、まずじゃがいもをよく水洗し、それを匏(かんな)掛けにしてむしろ(蓆)で干し、よく乾燥させたものを臼でつきだんこの材料にして重宝していた。

大正六年、鯉漁場を経営していた梅野清太郎は、チョペタン川水系の水車により、でんぶん工場も経営し

←高野でんぶん工場の帳簿

大正六年九月後
工
造設費計年帳
営業費
高野製粉工場

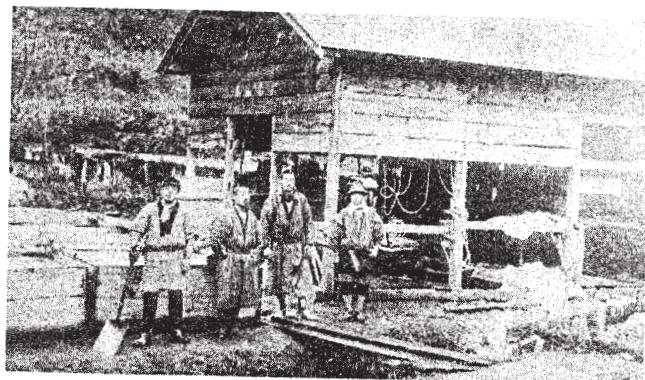
た。浅野豊吉を工場長とし、この年三〇九袋を製造した。この年の二、三ヶ月頃になり、でんぶんの価格もようやく安定し一袋一〇円四、五〇銭となった。

大正六年、梅野清太郎とほぼときを同じくして、浜町高野平治は、高野常吉、越中庄太郎らと共同で、関口の沢の川水を利用し、高野平治の畑地に高野澱粉工場を新設した。建設費に一、四七〇余円、営業費に九二〇余円を当て、一俵一円五三

銭のじゃがいもを買い入れ操すりも行ってた。

この年全町のでんぶんの生産量は一万二千斤(七二丁)、生産額は一万四百円であ

←共同でんぶん製造工場



った。でんぶんを輸出するには農産物検査員の検査を受けなければならず、一袋の検査料は三銭であった。

大正八年、泥の木工藤富五郎と浜町梅野清太郎は共同で、泥の木熊野神社下に水車によるでんぶん工場を新設した。このときの水車用水路許可指令書が残されている。

←でんぶんの生産額 (明治四三年七月〜四四年六月)

町村名	製造戸数	数量	価格	原料数量	価格
古平	二八三	五、〇〇〇斤	六〇〇円	七、五〇〇貫	四二〇円
美国	一六〇	八、四〇〇	一一、二九二	一一、六〇〇	五二五
余別	一〇五	二、五二〇	二五二	三、七八〇	一五一
余市	一〇一	一三、七五〇	八二五	一四、三三三	五七三

昭和三年

▼一月一日

起床五時、洗面後神仏に灯明を点し、家内無事に新年を迎えしことを感謝し、本年も一同無事に万事吉祥ならんことを念じた。五時一五分、祝聖会のお参りに禅源寺へ行く。途中西の宮（浜町恵比須神社）を参拝する。お寺でお参りの後、和尚の部屋で新年のご馳走を頂く。郷社（琴平神社）へ参拝する。六時半、ようやく夜が明ける、漁船は年内時化続きのため元旦でも出漁した。穏やかな上ナギである。途中年始をし八時半頃帰る。いい運動になった。雑煮を頂いて初刷りの新聞を見る。一〇時学校で四方拝の式があるので行く。一一時に役場で交礼会があり百余名が出席、一二時帰る。

▼一月二日

正月二十日の初売り、七時に板戸を開ける、雪が降っているが暖かく実に平穏な良い天気だ。九時頃から忙しくな

り、一一時から午後二時頃までが最も忙しい。刺網など予想外の売れ行きだ。磯廻り、カレ網などみんな出た。夜、売り上げを調べたら六二〇円程だ。三〇〇円もあれば上出来と思っていたらこれは予想外であった。

▼一月三日

昨日の快晴に引きかえ暴風

高野名事作さんの日記から

当時の世相を見る

(129)

雪、発売りは望外で本年も商売の幸先がよい。父は吹雪の中禅源寺へお参りに行く。

▼一月四日

カレ網大漁、殊にテックイの値段がよく一尾一円、漁師なかなか元気がよい。

▼一月五日

正月五か日というので晴れ着を着て歩く人の姿が見える。

今日は四月頃の鯉場のときのような天気だ。外で女の子が羽根つきをしている、東京の正月のような気がする。（六日から九日までなし）

▼一月一〇日

暖気で昨夜から雨が降り、雪が消えて三月頃のような天気だ。カレ網が百間、二百間と売れる。カレの値段一マス

（枡）二〇円以上とのことで漁師は元気がよい。

▼一月一一日

今日は商店では帖祝い日なので帳面の表書きをする。寒暖計は四〇度F（四・四度C）なので寒さ知らずだ。夕方からボタバタ雪が降る。

* 帖祝いⅡ商家では一月四日・一一日を帖祝いと言って、

この日に新しい帳簿類を綴じる（造る）と商売繁盛するという習慣があり、神棚に供物などを上げお祝いをする。

▼一月十三日

昨日からの大吹雪は近頃珍しい。今朝は雪が一尺以上も積っている。一日中雪が降り続け寒気も厳しい。この大雪で新聞も夜の七時頃配達になつた。

▼一月十四日

今朝は雪も降らず好天気、漁船もみな出る。店も客がポツポツあり忙しい。三重県の製網会社へ照会していた返事が来る、一円三〇銭というところで安いので、一万間注文すると打電した。綿糸の値段より安いくらいだ。

▼一月十五日

祝聖会の例会日、五時に起きて洗面後直ぐに出かけたら三番目であった。夜もすっきり明けて境内の雪景色がきれいである。六時から読経が始まり七時に終わる。午後港町方面へ出かけたがカレ網の漁船が帰って来る。磯回りも出

ている。

▼一月一六日

小学校で午後一時から、改正になった選挙法について警察署長の話がある。最初の普通選挙なので違反のないようにと注意がある。

※普通選挙に納税額や財産によって制限されない、原則として全ての国民に選挙権を与えるということだが、婦人参政権は昭和二〇年、戦後のことである。

▼一月一七日

一五日期限のカレ網の集金に行ったが、カレの値段が良いせいか全部入金した。夜になってスケン船が入り陸揚げしている。

▼一月一八日

妻は禅源寺観音講へ行く。天気もよく上ナギで四月頃のようにだ。刺網もポツポツ売れる。一〇時頃港町で火事だと言う。製材会社の向こうの元イの家が盛んに燃えている。大勢集まつたが、風もなく昼だったので一軒だけでおさまった。ガソリンポンプ車が来たがなかなか放水できない。

で気もめめる。機械は故障があるのでどうも安心できない。一戸だけで不幸中の幸いであつた。煙突の継ぎ目が原因のこと、近くを見舞って正午過ぎ帰る。

▼一月二十日

昨夜からの吹雪はなかなか止まない。正午から禅源寺で新潟県人会の発会式があるというので出かける。小林栄吉氏が経過を説明する。役員選挙は座長の指名する委員に一任することにする。終わって地酒と鍋焼きで懇親会となり四時頃帰る。

▼一月二一日

寒の入りで寒さは厳しく吹雪もひどい。役場で午後一時から鉄道漁港期成会の総会があるので行く。二〇〇人余りが集まりなかなかの盛会である。困主人が会長代理として議長席に着き、昨年からの運動の経過について説明した。幹事二〇名の選挙をしたが私も幹事に選ばれた。午後六時から新地町古盛座で、革新クラブ政談演説会があるので行く。

く。弁士は八名だったが半分は練習不足だ。九時頃帰る。

▼一月二二日

大寒に入り寒さも厳しい。新聞は昨日、議会解散のことが出ていた。各地とも初めての普通選挙による選挙なので、選挙の話に熱中している。午前一〇時から新潟県人会の役員会があるので否を誘い行く。会則の改正、会長、副会長の選挙をし、会長小林、副会長原田、高野平治に決まる。四時頃終わる。来る二五日には、同志会総会ののち政見演説があり、小樽から椎熊三郎が弁士として来る由、人気があるので今から評判になっている。

▼一月二四日

珍しい好天気で、どこの家でも屋根の雪下ろしや雪引きをやっている。店でも刺網がよく出る。そろそろ鮎場支度だ。浜へ出て見たが三月頃の鮎の獲れそうな空模様だ。沖を通る汽船もこのナギで心地よいことだろう。佐渡から干し柿が送られて来る、子供たちは大喜びだ。早速干さばを

送ることにした。

▼一月二五日

夜六時から古盛座で、同志会主催の政談演説会がある。満員でようやく入れた。古平の弁士は湯田君、高野君、山木君、大沢君、ほかに小樽革新クラブから三名来る。椎熊君は都合で来なかった。最後の青木君という弁士の演説は良かった。一日ごとに選挙熱が高まる。八時頃終わる。

▼一月二七日

天気はよいが風が寒い。磯波がありカレ網は休んだがスケソ船は出た。店は刺網の客がポツポツ来る程度だ。

▼二月一日

今日は祝聖会の例会。五時に起床して洗面後すぐに出かける。寺に着いたら四番目であつた。ストープにあたり世間話をしていたが、すぐに選挙の話になる。六時から読経が始まり七時に終わる。寒さも厳しくなかなかゆるくないが、これも修養のひとつだ。八時頃帰ったが吹雪になった。午後六時から美登利で鉄道期

成会が発起人になって、岡田代議士の歓迎会がある。その後演説会があるので会場へ行く。満員の盛況、岡田代議士が二時間にわたり政見発表あり、一〇時過ぎ帰る。

▼二月二日

選挙では第一区から次の候補者が揃った。民政党、山本、澤田、一柳、中西、政友会、森、岡田、丸山、高嶋、中立、納谷、久保、労働党、山本懸蔵、定員四名に九名の立候補者である。

▼二月三日

寒さがなかなか厳しい。上ナギになったのでカレ網、ほかの漁船も出た。この頃の新聞は選挙記事が満載である。

選挙もあと二週間に迫ったので一日ごとに熱が高まつて、夜、否へ行っているいろいろ話したが、どこへ行っても選挙談話に花が咲く。

▼二月四日

寒さが厳しい。午後五時から禅源寺で高野常三郎君の厄払いをする。祝聖会で観音経をあげ、のち酒肴が出る。皆

大いに飲み一〇時散会する。

▼二月六日

朝から太陽が輝き上天気だ。寒さも大分ゆるんだ、熊さんは竹すだれを編んでいる。店もだんだん忙しくなった。

▼二月七日

今日も上ナギ、磯廻りも出ている。アバ縄が着いたので馬車で倉庫へ入れる。九時頃にわかに火事だと騒ぐ、出て見ると煙が盛んにふき出している。大和田馬車屋から出火したという、風も無い穏やかな日だったが、隣の西村東一さんの家が類焼して消えた。消防ポンプの放水がなかなか出来なくて気がもめる。これが五、六月頃だったら大変だった。夜、風が出てきて時化模様となった。

▼二月八日

昨夜から吹雪が激しく大時化になる。澤田代議士の演説会が学校である予定だったが、時化で船が出ないので延期になる。一時から鉄道期成会の役員会があるので役場へ行く。三、四月頃に予定される臨時

議会で請願書への印を貰うことと、衆院候補者が古平へ来られた時の歓迎会のことについて協議する。山本、中西、澤田候補らを招待することに決定、三時頃帰ったが大雪だ。大和田さんと西村さんへ火災の見舞いに行く。夜になり風もだんだん静かになり天気もよくなった。

▼二月一〇日

今日は静かになったが漁船は出ない。夜は山本代議士の演説会が新地町と浜町である。歓迎会もあり、演説の始まったのは七時頃であった。応援弁護士四人、山本代議士も熱弁をふるい終わったのは一時であった。小学校の裁縫室は満員であった。

▼二月十一日

今日は小樽に出る日である。演説会が終わって帰る山本代議士一行も同じ富丸に乗る。かなりの時化だった。大分汽車を待つて一時頃小樽に着く。幸治の下宿にも行き、七時頃花園町など賑やかな通りを歩くと寒い。夏と違いブラブラ

散歩も出来ぬ。

▼二月一二日

日曜日で学校も休みなので幸治と本屋や井さんへ行く、大勢の人だ。このような設備をしてよく間に合うものだ。書道展覧会をやっている。昼は食堂に入りそば、だんごを食べる。三人で九五銭だった。が安いものだ。

▼二月十三日

ずいぶん寒い。朝食後、稲穂町へみやげ物を買うに行く。屋から幸治と文治を連れて市中を歩く。蓄音機店で田中首相の「国民に告ぐ」と題する演説をレコードで聞く。

▼二月十四日

六時半に起床。今日は帰る日なので支度をする。太陽がまぶしいような上天気。青空だ。余市の波止場に来て海を眺めるとまるで夏の海のように静かだ。澤田代議士が古平へ遊説に行くのといっしょになった。正午過ぎ帰宅した。子供たちへ雑誌、パンのおみやげやったら大喜びだ。禅源寺で禅学会があり四時頃行

く。説教を聞きのち読経する。

六時半、小学校で澤田代議士の演説会があり行く。なかなか感動を与える内容であった。一〇時半帰る。

▼二月一五日

祝聖会の例会、五時半に起床、洗面後すぐ出かけたが今日は五番目であった。台所のストーブにあたりながら選挙の話に花が咲く。二十日まではこの話で持ち切りだろう。

六時から読経、七時に終わる。前回よりシバレはゆるんだようだが、本堂にいると足が冷たい。例によって八時まで時事を談じる。店のほうはカレ網、鯨網の客で忙しい。一一時過ぎまで新聞を見るひまもない。

▼二月一六日

八時頃起床、日が余程長くなつたようだ。店はカレ網、刺網の客で相当に忙しい。カレ網一万間、今日までに全部売った。午後二時から古盛座で中西六三郎の政見演説会があったが、カゼ気味で行かなかった。本人は来なくて代理

弁士二人きたとのこと。

▼二月一七日

いよいよ選挙も近く電柱にはポスターが沢山貼つてある。新聞も選挙の記事ばかりだ。

六時から丸山候補の演説会が小学校である。先に古盛座であったので遅れ、始まつたのは八時近くだった。一時間半ほど熱弁をふるう。一〇時終わる。

▼二月二〇日

今日の寒さは幾分しのぎよい。いよいよ投票日だ。八時頃投票に行ったが大勢の人であった。私の一票は山本厚三に入れた。

▼二月二一日

選挙が終わり一段落したようだ。今日は市部の開票だが小樽、札幌の結果は如何、早く知りたいものだ。海は上ナギで磯まわりも出ている、青空の下、大海原を眺めていると心地よい。あと一〇日もすれば鯨漁夫が入り込み賑やかになるだろう。夜、園へ行き今日の開票の様子をラジオで聞く。今のところ中西、山本、

森の順、あと一人は誰になるだろう。

▼二月二二日

七時起床、一天雲無き青空だ。浜に出て見る、上ナギで漁船は皆出ている。春景色になった。この天気なら共栄丸、勇丸も今日は小樽から来るようだ。あと一〇日もすれば、古平も穴ごもりから急に賑やかになるだろう。新聞には昨日開票した六市の午後三時までの開票結果が出ている。今日開票される郡部を見ないと分からないが、三人はほぼ決定、残り一人だが三人のうち誰が入るか、今夜中にわかるだろう。

▼二月二三日

起床七時、選挙の結果や如何にと出て見たら、やぶ長前に第一区だけが発表になつてゐる。中西(民政党)、山本(民政党)、森(政友党)、岡田(政友党)、の四名が当選。今日も快晴、雪が解けてザクザクし、春のようだ。正午から小学校で学芸会があるので見に行く。一時間授業を見て、午後一時

から学芸会が始まる。

▼二月二六日

今日はまた近來になく寒さが厳しくなつた。子供たちは奥や店のコタツに入り、家中もなかなか賑やかだ。店の方も刺網が八〇〇間出た。漁夫の先発隊が続々と乗り込んで来た。原田、埴長、沖村田岸などの漁夫だという。一日ごとに町も賑やかになる。思い起こすと昨年はちょうど今夜から大吹雪で大雪となり、それが四尺も積もつて桂の沢では雪崩で家が押しつぶされ、五名が亡くなつてゐる。夜に入つて寒さもいっそう厳しく、風も強くなり荒れ模様になつてきた。

▼二月二七日

今日も寒さが厳しい、寒中に劣らぬ寒さだ。海は時化で漁船は休み、昨年の今日は大雪で大騒ぎをしたが一年の経つのは早いものだ。夜、小学校で火防組合の講話がある。火の元の注意は何より肝要である。

▼二月二九日

昨夜半に汽船の汽笛が二、三回聞こえた、漁夫を乗せた汽船が入港したのだろう。浜に出て見ると千トン以上もある汽船が入港している。青森から漁夫を運んで来たという、久しぶりの上天気、上ナギで漁船は皆出た。

▼三月一日

今日は祝聖会例会、五時に起床し洗面後すぐに出かける。外は真つ暗である、寺に着くと四人目であった。五時半から読経が始まり一時間ほどで終わる。外も少し明るくなっている、和尚の部屋で話をし七時半帰る。今日は秩父宮殿下が小樽へ行啓になりスキーなどをご覧になった後、青山温泉へ向かわれるとのこと。小樽は奉迎で随分賑やかだとのこと。店はスケソ刺網にかかると、店は沢江方面からポツポツ買いに来る。

▼三月二日

天気快晴、春景色となった。町は漁夫が入り、出稼ぎも帰って来て、鰾場準備にかかり活気づいてきた。今朝の新聞を

見ると、美国沖で探海丸が鰾三尾とったとある、例年より九日早いとのこと、幸先よしと、この分なら大漁かと皆喜んでいいる。夜、節句のご馳走にマンジュウをこしらえた、色のついたのもあり子供たちは大喜びだ。暖くなり春らしくなった。

▼三月三日

昨夜からの雨で雪の消えること甚だしい。昼前から雨が激しくなり、夜になって屋根がミシミシ音がし、家が揺れるような感じがするので気持ち悪い。起きて外へ出て見たが、一時頃大音響と共に屋根の雪止めが切れ、中庭に雪崩のように雪が落ちてきた、ガラス戸の壊れたところもあったが夜中なので、そのままにして休んだ。するとまたミシミシと音がするので気持ち悪い。雪が落ちないやうにと念じながら朝を迎えた。熊さんが来て大屋根の雪下ろしをやる、私は中庭の雪を掘り窓を見ると、ガラスや窓の棧が壊れている。これは

買えば済むことだが、何より人に別条がなくよかった。これからは屋根の雪下ろしは早いうちにやらねばならぬと思った。昼頃から大吹雪になり海も大時化だ。

▼三月五日

建網準備中なので朝早くから客が来る。雪がチラチラ降り出したが割りと暖かい。この頃議会解散説が新聞に見える。政友会、民政党が勢力伯仲なので、何れが政見をとつてもなかなかやかましい。

▼三月六日

この頃、古平でもカゼが流行している。朝から雪で時化、時々大吹雪になり少しも春らしくない。夜、小学校で納税宣伝の琵琶入り浪花節があり、父、妻らと聞きに行く。女の琵琶、浪花節共に良かった。一〇時頃帰ったが風が冷たい。

▼三月七日

風が強くと大時化になった、岩内から来ていたスケソ釣りの発動機船が港内に停泊中に錨綱が切れ、港町の木材会社の下に打ち上げられ木つ端微

塵になったとのこと。昨年以來これで三隻も難破している。スケソのような遠洋漁業が盛んになるにはどうしても築港が必要である。夕方になっても風は止まない。

▼三月八日

早くから電話やら客で忙しい。今日も一日中風が強くと大時化、余市通いも休む。新聞によれば本年の鰾予想は中漁の下、五五万石程度とのこと。この予想からすればあまり良くない、しかし悲観は禁物だ。

▼三月九日

風が止まず時化、余市通いは今日も欠航だ。カレ網、スケソ網は四日も止まったので、魚は売り物にならぬだろうとのこと。新聞によれば昨日の朝、小樽港を出港した米国貨物船(五千トン)と、高島の発動機船(一六トン)が塩谷沖で衝突し、漁船に乗っていた八人全員が溺死したとのこと。うち四人は親子で乗船していたという。気の毒なことだ。船は実に危険なことが多い。

II 膳箸の船印

岡田家の繁栄と 北前船と古平

請

負場所(商場)あきないば)であつた古平には、岡田家の残した港町の厳島神社がある。五代岡田弥三右衛門秀悦が現在地に宝暦元年(一七五二)創建したもので、社殿は神社の建築様式でもある入母屋造り(いりもやづくり)であつた。

陸地が海岸に迫る丘陵地帯をカムイミンダラと言ひ、アイヌの人たちが神として信仰している熊の遊ぶ神聖な場所としていた。

岡田弥三右衛門は商売柄信仰心が厚く、本店のある近江八幡の比牟礼八幡神社に御影石の常夜灯籠五基を寄進している。

蝦夷地を広く探検調査して多くの記録を残している松浦武四郎の蝦夷地再渡航日誌に「弁天

社、前の少しの岡の下に石段を登る有るなり。風景よろし」とある。社殿の中、正面に掲げてある『弁才天』の木彫りの額は、安政七年(一八六〇)運上屋の帳場らの寄進したもので、当時は弁才天も合祀していたと考えられる。

享和元年(一八六一)、入船町の漁業者が弁財天を祀る社を創建したと伝えられているが、ご神体は「厳島神社に合祀されたのではない」とも言われている。

明治一〇年頃、恵比須神社のご神体(事代主命)が盗難に遭つたことから、厳島神社に変わったと伝えられている。しかし、明治四年、開拓使は神仏混淆(しんぶつこう)昔から日本にある神と仏教の信仰を調和させる)の考え

から、弁天社を厳島神社と改称させているのでこの時に改称したのではないかとも思われる。

小樽にも漁場を持つていた岡田家は、山の上町に弁財社を建てたがこれが後の住吉神社の起源だといわれ、大正七年、開道五十年記念式で表彰されている。

近

江商人の松前で活躍した人々については、正徳二年(一七二二)、各店の積荷に対し



→ 港町恵比須神社社殿と灯籠



↑ 社殿正面に掲額されている弁才天の額

賦課金(税金)を差し出した勘定書きがあり、その中に岡田弥三右衛門、西河伝兵衛などをふくめ一二名の名前がある。

その後一三名に増えているが、寛延元年(一七四八)には一一名に減り、松前での近江商人の活躍はこの頃から次第に弱まってきたようである。

先にも紹介した『北海随筆』によれば、「松前城下の商売人といえは皆他国のもので、江州大溝・八幡・薩摩柳川村の者が多い」とあり、この中でも八幡・薩摩柳川村

出身の成功者が目立った。これらの商人は漁場の開発や藩に対する功績があつたとして、この二か村の出身者は両浜組とか両浜商人などと呼ばれ、松前藩でもほかと区別して優遇されていた。

東

遊記という本によると、
「松前に両浜町人という

者がありその訳を尋ねると、もともとこの地は産物が沢山あるが、はじめは今のようにならぬ産物が諸国に伝わらず、漁業を職業とする者もいなかったが、江州八幡・柳川の町人がここに来て店を出し、米・みそなどを仕送りするようになってから漁業で稼ぐ者が集まり、稼ぎも年々盛んになってきた。それで両浜町人と言われる者たちが藩主に目通りを許されるようになり、外の町人たちより重んじられるようになったのだという。」

薩摩・柳川の両村は琵琶湖の湖岸にあるが隣り合っているのだから一つの浜とし、八幡と合わせて両浜と言われるようになったもので、長く組合をつくって自分たちの商権の維持に努め、その共同の力によってあらゆる方面に権

利を獲得した。海の関所でもある沖口番所という関税を取り仕切る役所でも、両浜商人が上方から運んで来る荷物については時の相場に關係なく、木綿・小間物は低価格に見積もつて口銭を徴収していたのも、その優遇されていたという現れである。(一般の場合はその度ごとに査定をし、価格の一分が税であつたが後には二分となつた)

蝦

夷地に進出した商人はまず松前に出店し、物資に

乏しい蝦夷地に物資を輸送してアイヌの人たちの生活に入り込み、また、多数の人たちを使役して産物の増産に務めた。これらのことは蝦夷地の開発や文化の向上につながるものであつたが、權利による搾取でもあつた。

このことについて、近江八幡が尾張藩の領地になり藩の学者岡田文園が、天保の頃(一八三〇)に書いた『江州八幡志』に次のように載っている。

「八幡商人による商業の範圍は、西は長崎・薩摩、東は南部・津輕は言うに及ばず、松前・函館、蝦夷地にまで行き渡り、国々には

出店を設け、海陸の運送により大利を得ていることは諸国商人の及ぶところではない。その商法は国内の産物だけではなく、京都・大阪など西国一切の名産を東国へ輸送し、帰りには仙台・下野などからの布地、出羽の紅花、近頃流行している上州辺りの織物類など、その外蝦夷地の昆布・数の子類を積んで西国へ売り捌く大仕掛けな交易をしている。このためその利益は正に(ヒサゴの子を生ずる如し)……とある。

滋

※(へ)内のことわざの意味不詳
賀県八幡町史にはこのことにも触れて、

「八幡商人の盛んな商業振りを誇大ながらよく簡単に表している。近江商人は徳川三百年の間に広く全国に商業網を張り巡らし、地方の大商人といえはほとんど皆彼らと言われるまでに根強い勢力を持っていたが、八幡商人もまたこれに多く関与していた。

我が郷土の祖先はよく『忍耐』して刻苦欠乏に耐えつつ、僻遠の地の隅々に行商し、或いは望郷の念にかられつつもよくこれに打ち克つて、出店を維持経営したので

ある。この忍耐がさらに積極性を帯びて事業への精進に向かうときは『努力』となる。彼らは勤勉努力して商業の発展拡大を念頭から忘れず、これに成功したのである。この商業的な努力こそ、他地方の人には到底模倣し得ない我が商人独特のものとして、今に高く評価されているところであつて、子孫は永くこれを堅持せねばならぬ。右の忍耐と努力の崇高さを知り、商人道徳としての敬虔な襟度を持するとき自ら実現するものが『節儉』である。祖先の余光としてではなく、自ら努力して得たものに対する念慮は金錢の尊さへの自覚となり、近江商人の苦心が激しいほど節儉の美德は自ら実践されて、彼らは巨財を蓄積したのであつた。以上の忍耐・努力・節儉をもつて近江商人の三大美德とせられるのも蓋し意味のあるところである。」

少し長い文章だが戦前の郷土史(町史)のひとつの特徴として、我が町の誇り、そして教訓めいたことがみられる。同じ事実であつても、いろいろな見方のあるのがおもしろいので引用した。(続く)

あかいアルバム

大 澤 文 子

例年になく猛暑が続き三、四年來風邪をひいたこともないのに、二日ほど寝こんでしまった。元來常に体温の低い私なので暑さには弱い。冷蔵庫の氷のかけらを幾度か口にふくみ、アイスクリームを求めどうやら暑さを凌いでいたが…。

例年ならば病院へ駆けこみ二時間余の点滴を受けているはず。だが年齢と共にその元氣もない！

小庭の丈高く茂るあか松の葉かげに毎朝飛び来る雀たちに、

「具合がよくならねえ、餌を買ってくるから待っててネ」

日課の如く声をかけ猛暑の朝々を過ごしたのだった。

幾日か過ぎそろそろ部屋の中を片付けなくてはと思い、ふとベランダの隅に誰か仕舞い忘れて

帰っていったのか、あかい表紙のアルバムが投げだされているのを見つけた。本棚からとり出し眺めていたのであるが、帰るときは急ぐので仕舞い忘れていったのである。

どれどれ：掃除の手を休めアルバムを手にとつて見た。興味しんしん、それは次男の若かりし頃の一冊だった！ そうそうあの頃「次男の新居を訪ねてみようか」

…と、急に夫と共に肌寒い北国を発ち飛行機に乗りこんだのだった。

板付飛行場へ足をつけたタタムン！ フーツとむせかえるような暑さだったことを覚えていた。その頃次男は二日市の鬼面(きのおづら)という所に住んでいた。

次男夫婦は子どもっぽい笑顔を

見せ、大きく手を振って迎えてくれた。曼珠沙華の花が畔のおちこちに目を欺くほど真つ赤に燃えていた。やがて竹林の中にある彼たちの家についた。

あまり広くもない彼の居間には書棚がふたつ、厚ぼつたい本がぎっしりと並んでいた。小狭い台所にはいくつかの食器類が整然と置かれていた。学生時代の彼の性格そのものである。その夜、虫のすだきが激しくなかなか寝つかれなかった。

幾度か立つ縁側のガラス戸に不気味な生きものがピタツと張りついていた。

「夜の虫を食べにくるヤモリというんだよ」と、次男が教えてくれた。ひと騒ぎしているうちに雨の朝を迎えた。

先ず両隣りの家に挨拶に出かけた。向かいの家にはスモン病を患っている主婦がいて、人のよさそうな家人が応対に出してくれた。

翌日は鳥栖駅から熊本城、指宿から宮崎へ行く予定がどしやぶりの雨のために不通という。急遽鹿児島行きとなる。

さすが車中は次第に暑くなり

汗が流れる。やや訛りのある物売りの女の言葉が妙に胸にしみるようだった。雨も小止みになり宮崎へ向かう。車中で隣の席に人の好きそうなおじさんがいて、種々話を聞いてみた。おじさんは丁寧にも色々教えてくれるのでうれしかった。

「この辺はなア、あか松が多いが年々松くい虫が発生してなア、枯れてしまふんだよ」

「処置策を講じているがなア、なかなかはかどらないんだなア」

「また昔のような屋根の土瓦は値が高いので、今はセメント瓦の色付きが多く使われているんだよ」…等々。おじさんは静かに淡々と教えてくれた。

青島でバナナの木と木の間に竿を渡し、洗濯物を干してある家もあり面白いと思った。

またコスモスの大群落が生駒高原の山肌を埋め、まるで絵紙を張りつけたような美しさが今でも忘れることはない。

日南海岸、竜舌蘭を背景にポーズよろしきスナップ写真！

興にのりあかい表紙のアルバムに過ぎた秋雨の真夜…。

『笑い』と『達成感』

葛 西 庸 三

平成十七年六月、八十四歳の次兄が札幌市内の病院に入院し胃癌の手術を受けた。

次兄の長女と私と妻が付き添った。手術が終わり担当医に呼ばれた。摘出した胃が机の上の白い容器の中にあつた。見ますか、と医者が言った。見ます、と私は答えた。

―胃は全部摘出しました。印環細胞癌で低分化型(最も悪性)でした。今のところ転移は解りません。余命は、早ければ一ヶ月、長くても三ヶ月です。…医者は事務的に言った。私は動転した。姪と妻は顔をふせた。涙が滴り落ちた。私達は控室へ戻った。

次兄は間もなく病室へ戻って来るはずだ。相部屋なので他の患者もいる。

さて、次兄の顔を見た時、最初にどんな言葉をかければよいのか、私の頭の中で様々な思いが回転し

た。直ぐ腹が決まった。

―よし、こうしよう。さつきの医者の言葉は三人の胸の奥に封印しよう。辛いだろうが決して誰にも言わない。これから病室へ入つてもいつもと同じ顔で接しよう。

姪の切ない気持ちをも十分推し量りながらも、私は妻と目配せしながら言った。深呼吸をし顔の引きつりを直して病室へ入った。
―やあ、手術早かったね。医者から詳しく説明受けたよ。全部取ったけど転移はないし、心配はないつて言つてたよ。

―そうか。よかった。頑張るよ。

次兄の声は以外に明るかった。

当時私は、前立腺癌の治療を受けて五年目であつた。順調に回復していた。その間、癌に関する本は四十冊近く読み勉強した。その中で病氣と闘う力を鼓舞された本が数冊あつた。次はその中の三冊である。

「ガンを治療するキラー細胞の秘密」(伊丹仁郎・講談社)、「笑いの健康学」(伊丹仁郎・三省堂)、「生命力」(軽部征夫・三笠書房) 私はそれらの本から癌と闘う勇気を得た。

要約すると「癌細胞を攻撃して撃退させるキラー細胞を活性化させるのは『笑い』であり、同時に「生命力を高めるためには精神面の占める比重が極めて高い。『達成感』『使命感』を持つて生きる」ということ。

私は五年間、毎日鏡に向かつて笑い、歩き、ライフワークの完成を目指す生活を徹底した。前立腺癌に勝つメドがついた。

次兄は二週間ほどで退院し、抗癌剤を受ける通院生活が始まつた。

私に次兄に三冊の本を送り、私の体験を詳しく書いた。毎朝『笑い』を実行し、少しでも歩き、前向きに生きて欲しいと訴えた。

こつそり姪に電話して様子を聞くと、次兄は毎朝鏡に向かい、両手を高く挙げながら大きな声で笑い続けている、と言つた。私と妻は何回も拍手した。

医者が宣告した「一ヶ月」が過ぎ、「三ヶ月」も過ぎた。私と妻は胸をなでおろした。

―調子はどうなの。笑うの、やつてるの。

―やつてるよ。抗癌剤で辛い時もあるが、食欲もあるし、ビールも少しは呑んでるよ。

次兄の声には少しづつ力強さが戻つていた。

半年が過ぎ、一年が過ぎた。安堵した

―調子よくなつたら、また薄野でカラオケでもしようや。

―そうだな。楽しみにしてるよ。

その日が早く来ることを、私と妻は神に祈る気持ちで待った。

今年の三月、次兄は腹膜炎を起こして緊急入院した、と姪から連絡が来た。一週間後、次兄は眠るが如く静かに息を引きとつた。八十六歳であつた。

「長くて三ヶ月の命」と宣告されてから、約二年近く比較的元気で生き続けた次兄の姿を思い、私は改めて「笑い」の効果と「達成感」の意義に思いを馳せるのである。

「古平町の皆さんへ」
リポーター・上平奈波さん
NHK札幌放送局放送部



「古平町の方々の素敵な笑顔」
毎週月曜日・金曜日の午前1
時5分から放送しているNHK
北海道制作「ほっからんと北海道」
の中で、毎回、素敵な笑顔の方々
を紹介するコーナー『この街この
笑顔』のリポーターを務めています。
上平奈波です。

古平町を訪れたのは9月末、こ
の日は曇一つない快晴で、古平町
には豊かな自然と青い海が広がっ
ていました。古平町では、五百羅
漢や古平温泉などに案内していた
だき、歴史と共に歩んできた古平
町の様子、そこで活動するたくさ
んの方々とお会いすることが出来
ました。みなさんの温かいお心遣

いと魅力的な笑顔がとても印象的
です。まさに笑顔の街、古平町で
した。
この日、取材に協力いただいた
古平町のみなさんには厚く感謝
を申し上げます。そして、今回案
内を務めて下さった村井さんにも
本当に感謝しています。ありがと
うございました。

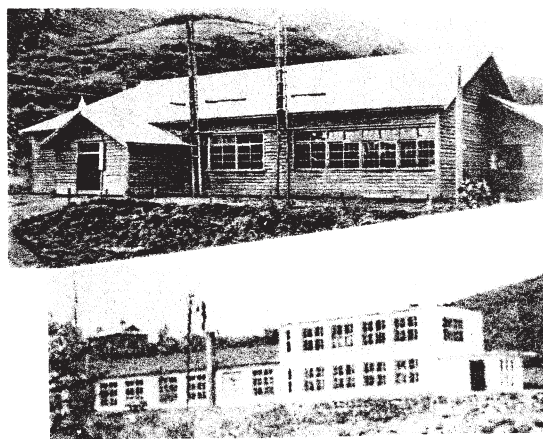
合わせてした。

放送では赤平市の
瀧の上公園付近が写
っておりましたが、古
平川の河岸に見られ
る、語源ともなった
『フレーピラ（赤い
崖）』の様子は残念な
がらういぞ見られま
せんでした。

撮影の始まったのは、
遡上する鮭を見物す
る人たちが集まってい
る古平橋の上でした
が、海洋センター裏
側の河畔では、漁協
による採卵のための
鮭の引き網が行われ
ていて、急遽そちらに
移動しました。鮭漁

NHKテレビ

『ほっからんと北海道』 古平町の魅力を紹介

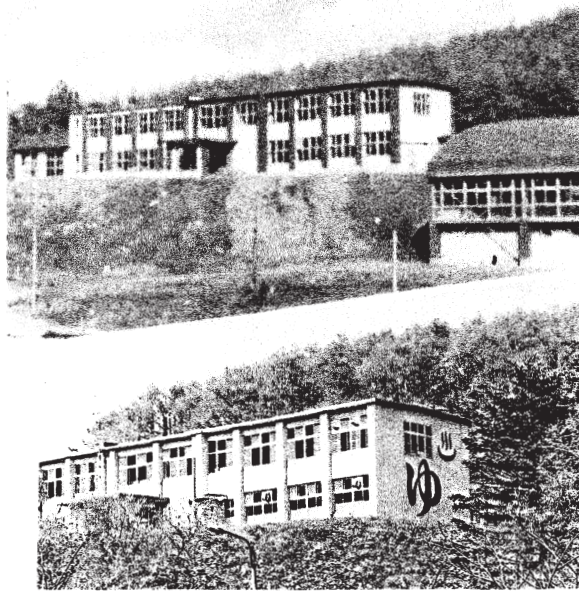


については先号でも触れましたが、
見物している子ども達からは興奮
気味の大喚声が続きました。
←新地分校 特別な思い出の
ある木造校舎と、鉄筋コンクリ
ート一部2階建ての新校舎

「ふるびら温泉は、木造校舎時代
の新地分校時代を知る人にとっては
殊更に懐かしい場所でもあります。
現在の駐車場に校舎があり、一望
館の建っている場所はグラウンドで
した。その後鉄筋校舎が新築され、や
がて町立古平高校に替わりました
が、道立高校への移管を目前に新校
舎に移転してから暫くは廃校のま
まになっておりました。

古平に温泉？ などということば、
昔であれば誰も思ひもしないこと
ですが、昭和六十二年、町民の要望を
聞くアンケートで断トツの一位とな
り、早速掘削したところ見事源泉
を掘り当て、鉄・ナトリウム成分の
多い泉質から、数年で忽ち十万人が
訪れるという健康と美肌の名泉と
なりました。校舎の跡地利用はここ
の市町村でも盛んなようです。

←学校統合により分校跡は古平高等学校(定時制)となったが、道立高校への移管により昭和54年現在の新校舎に移転。旧校舎は平成8年ふるびら温泉・一望館として再生、現在に至っている。



秋を誰よりも楽しみにしている『ごめつこクラブ』の農園を訪ねました。

古平大橋からやや上流に向かった古平河畔の沖積平野の一角に、二軒ほどの畑を借りて自慢の農園がありました。サツマイモを掘っているところでしたが、早速長谷川会長さんからお話を聞きしました。

今年で百歳を数えるという、温泉大好きという田岸カコさんも来ておられましたが、正に健康そのもの、さらに健康の秘訣をお聞きしたら「人生クヨクヨしないこと」の一言。

今年で第三十二回を数える伝統の古平ロードレース大会には、第一回から参加されているという健脚ぶりも披露されておりました。

子ども達も一緒に参加して活動し、共に地域で楽しく生活できるような地域づくりをしていくことを主眼にして、皆さんからのご援助をいただいております。

農園の象徴ともなっているパン焼きのかまど前では、杉本さんが慎重に焼き加減を見ておりました。

『ごめつこクラブ』にこうしてかわつているのは、障害のある無しにかかわらず共にやるという話に感動、ここに集まる子ども達を見ていると可愛くって可愛くって仕方がない。その顔を見ていると疲れなんかふとびますよ。焼き上がったパンが並ぶと、香ばしい匂いに誘われるように集まり試食が始まります。

「さあ今度はサツマイモ掘りだよ」の声に、道具類を持って畑に集まる。大人の人がスコップで掘ったあと、蔓を引つ張り小さいシャベルで土を払うと、赤い大きなサツマイモがざっくざっく、たちまち大きな歓声が沸きます。古平でサツマイモの栽培は珍しく、どのように生長するのかを見せたいぐらいでした。

このほか畑で収穫した新鮮な野菜は、決まった土曜日の夕方から特設

「古平河畔での鮭の引き網漁」



の売店で販売されています。

売店では店員さんに早代わりした子ども達を交えて、お客さんとの交流が始まり、無農薬・有機肥料で栽培の生産品が格安で売られています。リポーターの上平さんも「これは安い安い」を連発してどうさり買ひ込んだようでしたが、自分の間はこの味を噛みしめていくのださるゝとしよう。暮れやすい秋の日は、早くも黄昏どきでした。

この後、禅源寺の五百羅漢図の撮影となりましたが、何時とはなしに「この五百人の羅漢さんの中には、自分とよく似た羅漢さんが必ず居ます」という言い伝えがあり、スタッフ一同で選んだのが上平さんにそっくり？の一枚でした。羅漢図のモデルは皆男性だと言われていますが、女性がいても面白かったので、羅漢さんがなにか急に身近に感じられそうに思いました。

放送されたテレビをご覧になり、「新しい古平の魅力を感じた」という声もあり、自分たちの住む町を視点を交えて見るというのも、また意外な発見があつて楽しいものかも知れません。ふるさと創生への手がかりにでもなれば、まさに福来る！という思いでしょうか。△終わり▽

秋来れば秋を詠みたる君の歌掲げて偲ぶ去りたる友を
手紙など書きて如何程に真実を告げるべしや儚なし我は
読むべきを積みて幾冊枕辺に散りしをり我の心のすさみ
傷心の裡は語らず夕べ散る秋明菊の花拾いゐつ
見慣れたる前山なれど紅葉は日々一日と移ろひ見せぬ



瀧 内 優 子

張りつめし心をほどくかたはらに晩秋の風は芒をかすめゆく
散り敷ける庭の紅葉は湿りゐて掃ける手首に重み伝はる
光ふかく宿して澄めり雲一つ遠く過ぎたる後の秋空
野の径の隅ずみに秋日輝くと思へば我も光をまとふ
とにかくに今日も暮れたり森閑と己が鼓動を聞きつつ眠る

◆◆編集集雑誌◆◆

▽一〇月末に文化祭作品展示会があり、例年やっているのが『古平の昔を知る写真展』と題して二四点の写真を展示し、それらに関係して四〇点余りの写真を『ふるさとのアルバム』(第11集)として発刊しました。展示した写真をご覧になった方が家庭に帰って、そのことが話題になってくれたら幸いです。東京古平会があつてそれにも、ということでもアルバム

一転して大凶漁、NHK札幌放送局が開局、大相撲の実況放送や、「ラジオ体操」の放送が始まる、この年の総選挙・道議会選挙から普通選挙となる、政友・民政会の二大政党時代になる、全国で共産党員の一斉検挙、稲倉石鉱山を鉄興社が買収、昭和天皇の即位式、中国大陸では後の日中戦争に発展するような事件が起きる等々、興味深い日記が楽しめます。

(古平町役場は前年の昭和二年、八〇年前、建築費約三万五千円で近代的な庁舎として竣工)

▽先ごろのNHKテレビ(ほつからんど北海道)での古平の紹介が話題になっているようです。リポーターの上平奈波さんがコメントをメールで送って下さいましたので、当日の行程と合わせてご紹介しました。ありがとうございます。ただ写真の印刷が不具合で、顔が「テレビと違う?」のはお詫びしておきます。

▽巻末の『古平町史年表』で、積丹国道(229号線)の開通をお伝えしましたが、次号ではそのときの町民の熱気ぶりを「開通のよるこび」として当時の写真などを紹介する予定です。

▽『せたかむい』の発行が大変遅れていて、皆さんから「まだかまだか……」催促を受けていますが、仕事場が分かれてしまったことや、いろいろと資料の調査などに手間取ってなかなか順調にいきません。途中、アルバムの発行などがあつてなお遅れてしまいました。何とか挽回をと考えておりますので変わらぬご愛読をお願いいたします。

▽皆さんから大変好評で連載中の高野名幸作さんの日記も、いよいよ大正から昭和に入りました。昭和二年は欠けておりますが、昭和三年は私達の生活にも関連の多い年でした。大正時代からの鯁漁が

▽皆さんから大変好評で連載中の高野名幸作さんの日記も、いよいよ大正から昭和に入りました。昭和二年は欠けておりますが、昭和三年は私達の生活にも関連の多い年でした。大正時代からの鯁漁が

悠

雜詠「十月号」
主宰 水見壽男

万緑の山は動かず波高し
越野清治

万緑や沖の一帆水尾曳きて

薫風や白波淡く立つ岬

稜線の皆白くあり風薫る

芳しき松の緑や日差し濃し

水盤に溪蓀を活けて母端座

縫ひ上げて鏡の中の夏衣

鳥の子言葉知らずやギユンと鳴き

水鉢の目高きよりと目をむきぬ

天狗山湧き出づる雲緑濃し

はらみ帆の雲動かずや夏の空

岩燕ブルーの海をほしいまま

女郎子岩纏へる岨の岩燕

薫風や岬かがやにかがやかに

潜門日影にひそと花菖蒲

深底くぐり抜けとぶ岩燕

海鳴りも今日はおだやか五月晴

山口悦子

越野敏雄

高橋重子

初郭公遠き山より林より
外山俊久

夏の海帆に風はらみ打瀬舟

下駄の音浴衣の似合ふ男衆

ほうほうと掛声あげて鶴匠かな

戻りて零れし雨に溪蓀さく

夏沖に海豚をめがけて鰐を打つ

まだ空の眠れる丘やほととぎす

岬鼻の風籟鈍く五月雨るる

薫風や石狩湾の魚影濃し

潮の香もおかずとなりし朝のいか

烏賊売りの声に味ある港町

紫陽花の色に近づく海の色

青嵐終着駅は岬かな

六月の波が捲りし海の色

万緑に入りて迷路の風の道

海鳴りに声絡ませしほととぎす

潮の香に馴染み切れざる夏の蝶

夏の月微笑み放ち湾に座す

五月雨降り増さりつつ明けにけり

堀典子

【句評】

本間寿昭

渡辺嘉之

室谷弘子



怒涛

二七

— 一〇月号 —

朝顔の雨染む程にあざやかに

美しき雨の雫と花菖蒲

外山 俊久

若竹の生ふる大地の柔らかき

越野 清治

日一日馬が草食む夏野かな

老鶯の遙かの声を風に聴く

齊藤 波留

星空に遠く心を投げて秋

堀 典子

積丹の烏賊火見下ろす湯宿かな

山口 悦子

花火師の作る尺玉宴かな

嫁ぎ来て七十三年墓洗ふ

越野 敏雄

天の川船音近き廻り道

本間 寿昭

過去未来そして現世や秋の宿

物干しの竿片はづし野分去る

横揺れの船横揺れの月の漁場

渡辺 嘉之

初秋の気配漂ふ部屋の風

流灯や帆風緩みて遅れ行く

肥沃なる大地の恵み秋来る

磯波のぶつかり合つて秋来る

箸からめ冷麦食むも心居て

大和田 絵伊

海原の青さ揺さぶめ秋の風

着ぶくれて耳をそば立て集会所

夕風や出船の支度夫婦船

香をきき袖に落して風炉の席

大花火対岸の峰近く見す

室谷 弘子

新涼の山を背にして露天風呂

高橋 重子

仲谷 比呂古

古

平

俳

句

会

古

平

俳

句

会

古

平

俳

句

会

古

短歌

古平岬短歌会

雲の中おそく出でこし朝の日に向きて子鴉おどるがに飛ぶ

池田 テル

夏去りて巡る季節や虫の声涼けく鳴きて夜もすがらに

金子 寿子

今朝の秋トリムの道に露草の葉先に光るひと粒のつゆ

坂本 信子

おもおもと花咲き盛る白ダリア雨の合間に添え木ほどこす

鈴木 時子

ひっそりとひととき暑さ癒さるる砂浜に咲く昼顔の花

田中 香苗

暑き夏すぎたる庭の赤松の緑は日ごと色増してゆく

丹後 初江

夏休みテント遊びに來し孫ら暑き日つづき日焼けて帰る

寺田 カツ子

窓際に差す木洩れ日の柔らかく雲間は霞の夏の終りぬ

仲谷 喜美能

枝豆の雨に勢ひし菜園に四つん這いになりて草取る

東 美知

夕べひとり浜辺の道を歩みたりなにかひんやりアス

ファルト句ふ

堀 典子

俳句

古平俳句会

岳樺林より湧き青嵐

越野 清治

カーテンを引くには惜しき星月夜

斉藤 波留

新涼と磯でかもめもつぶやきぬ

山口 悦子

稲妻に目蓋閉じれば掠め去る

越野 敏雄

着古して紺に落着く浴衣かな

大和田 絵伊

砂浜も相撲場となり子等の声

高橋 重子

花の雨惑ふ心に降り止まず

外山 俊久

移ろいのどこか風音秋に入る

堀 典子

二日目の銀河の下の沖泊り

本間 寿昭

波尖り風なお尖り秋来る

渡辺 嘉之

七夕や密かに一句結びけり

室谷 弘子

星一つ大きく光り里の秋

仲谷 比呂古

古平町史年表

昭和33年 (1958) ～続き

10/10：国道229号線に架かる古平橋が竣工し、慣習によって桐沢定吉・木村孝藤さん二家族の三夫婦による渡橋式が行われ、テレビニュースでも放映される（国道開通については次号）

10/15：積丹国道完成記念碑の除幕式と、禅源寺で工事による犠牲者の慰霊祭が行われる

同 ：国道229号線・余市～古平間が開通し、開通式を余市町富沢町国道で、祝賀会が古平中学校体育館で行われる

10/17：稲倉石小中学校が校旗を制定し、同校PTAがこれを寄贈する

12/24：古平漁業協同組合が50ト貯油タンクを漁港基部に建設設置する

12/ー：古平漁港予算が全国で第7位の金額となる



↑ 神式により渡橋式が行われる



↑ 『積丹国道』と命名・記念碑

昭和34年 (1959)

1/14：古平漁業協同組合の特別助成事業として、漁船修理場が完成する

1/31：暴風雪で防波堤の一部が決壊し、漁船にも大きな被害が出る

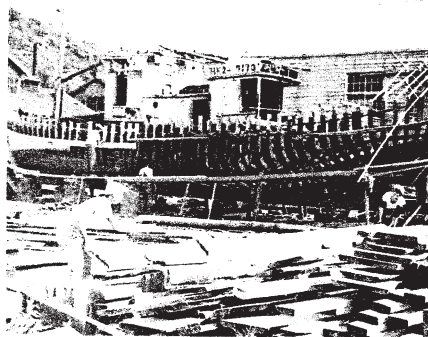
2/21：後志総合開発北後志ブロック会議が古平町役場で開かれる

2/23：HBCラジオが古平で録音した『練場をしのびて』が全道に放送される

3/5：稲倉石環境衛生会が、環境衛生のモデル地区として道から表彰される

4/ー：西部地区に若い年代僧による二葉婦人会が結成される、会員80余名。会長に小竹栄子が出される

5/25：禅源寺で本山からの布教と慰安の浪曲大会があり、本堂は満員の大盛況であった



↑ 新設された古平造船修理場
（現在プレジャーボート管理場）

→
二葉婦人会三十周年
記念誌（平成元年九月）

二葉会

乙葉

創立三十周年記念誌